御木宏美
illustration
青海信濃
SP
～淫愛～

# ＳＰ～淫愛～

《立読み版》

御木　宏美

イラスト　青海　信濃

1

摩央(まお)は腕時計に目を落とした。
十八時十八分。出発予定時刻の二分前だ。
「大原(おおはら)さん」
本日、チームを組んでいる大原多賀子(たかこ)に声をかける。
その大原も同じように左手首にはめた自分の腕時計を見やった。
二人の時計は、毎日、その日の勤務に就く前に、時報で秒まで合わせてある。
大原が腕を下ろし、一つ息をついた。表情に変化はない。けれど、渋がっている雰囲気がどことなく伝わってくる。
「遅いですね」
摩央は思いを素直に口にした。
「三浦(みうら)」

とたんに、冷ややかな口調ときつい眼差しで睨みつけられた。
「え、あ、すみませんっ」
視線の意味を察し、摩央は慌てて謝った。
二人は警視庁四万人の警察官のなかから選抜された警備部警護課所属の警護官（SP）である。
政府要人を警護する警護官は、総理大臣をのぞいて、通常は二人一組で警護対象者を担当する。女性閣僚が当たり前になった昨今、女性のＳＰも珍しくはない。
大原は三十代後半。ＳＰ歴十五年のベテラン警護官である。身長は百六十センチ台前半。一七八センチの摩央と並ぶと小柄になるが、体育大出身で、柔道三段。きびきびした動作と男勝りの性格にはなにやら風格がある。なにより、長年、警備の最前線についてきた経験は伊達ではない。彼女はＳＰに課せられた使命と義務を熟知している。
警護対象者を護るだけがＳＰの使命ではない。政府要人を密着警護するＳＰは、ともすれば国会議員や霞ヶ関の役人以上に政府の機密を知る立場にある。なにを目にしても、なにを耳にしても、決して感情や意見を表に出さず、他言しない。それがＳＰに課せられた義務だ。

ＳＰは人間（ヒト）であって人間（ヒト）でない。生きた盾（モノ）なのだ。ゆえに警護中の私語は厳禁。警護対象者の動向について感じたことを口に出すのもご法度だ。

摩央は二十四歳。警視庁に入庁して二年。ＳＰ歴はまだ一年余りの新米である。当然、経験値も、心構えも、大原には及ばない。ときに今のような失態を犯して、叱責を食らう。

永田町や霞ヶ関の住人、特に四十代以上の男性の間では、依然として女性を下に見る傾向があるが、摩央にとっては、大原は見習うべきところが多い存在（ヒト）、尊敬している先輩である。

そのとき、部屋の外で人の気配がした。

摩央は瞬間的に雑念を追い払い、背筋を伸ばして出入り口へ視線を向けた。大原はもちろん同じように注視している。

扉を開け放ってある出入り口の向こうに、訪問着姿の首相夫人、八角恵子（やすみけいこ）が年配の女性私設秘書をともなって姿を見せた。

「お待たせしてしまったかしら？」

慌しく内閣総理大臣公邸内の警護官の控え室に入ってきた恵子は、帯揚げの収まりが気になるらしく、左手の親指を帯の内側に入れてしきりに直しながら、待っていた二人の警護官に申し訳なさそうに声を

かけた。
「まだ時間はあります」
先ほどは一瞬にだが、摩央同様に時間を気にしていたはずの大原が、そんな気配は微塵も現さず、落ち着いた口調で答えた。
「どうぞごゆっくりお仕度なさってください」
規則を厳守するだけではなく、女性にとって身なりがいかに重要事項であるかを察し、こういう気配りもできる。摩央が大原を尊敬している理由の一つだ。
「ごめんなさいね」
恵子はすまなさそうにわびて、出入り口の扉の脇に置いてある姿見へと小走りで向かった。秘書があとを追う。
恵子が秘書の手を借りて姿見の前で身支度を整えている間に、大原は身につけた無線のマイクに口をあて、玄関前にいる警護官と恵子の乗車を待っている要人送迎車の運転手に向かって、言った。
「まもなく出ます」

『了解』
摩央と大原のイヤホンに男の声で返答があった。
同僚の返事を受けて、摩央は控え室から廊下に出た。
周囲を見回す。
警護官の控え室は玄関脇にあり、目の前には赤い絨毯を敷き詰めた玄関ホールが広がる。
建物が竣工されたのは一九二九年。以降、二〇〇二年まで、ここは内閣総理大臣官邸として使用されていた。情報化社会に対応できないという理由で、西側に新官邸が建設されたのを期に、数年をかけて、旧官邸は公邸として再整備されたのである。
建物は、長らく権力の館として君臨したことを物語るにふさわしい、煉瓦色の古色蒼然たる西洋館で、館内のいたるところに施された彫刻や、ステンドグラスに彩られた玄関ホール、正面の飾り階段の豪華さは圧巻である。
官邸として使用されていたころは、総理大臣を筆頭に政治家、秘書官、番記者、官邸職員などが大勢行き交い、それを護るＳＰや守衛の数も数十人に及んで活気があったが、公邸となり大半の住人が新官邸に移ったあとは、職員や守衛の数もぐっと減り、広々とした玄関ホールには静寂が漂っている。

人影は見当たらない。

摩央は振り返って室内の大原に告げた。

「異常なし」

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

ＳＰ～淫愛～

《立読み版》

発行日　２０１１年１２月３０日
著者名　御木　宏美
イラスト　青海　信濃
発行所　【ＭＩＬＫ－ＣＲＯＷＮ（ミルククラウン）】
株式会社水晶院
http://www.milk-crown.net/

(C) Hiromi Miki 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。